

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月30日現在

機関番号：	37102
研究種目：	基盤研究(C)
研究期間：	2010～2012
課題番号：	22530201
研究課題名（和文）	アダム・スミスにおける倫理と経済学：共感と分業の理論体系
研究課題名（英文）	Adam Smith's Ethics and Economics: the theory of sympathy and division of labor
研究代表者	
高 哲男 (TAKA TETSUO)	
九州産業大学大学院経済・ビジネス研究科・教授	
研究者番号：	90106790

研究成果の概要（和文）：

本研究の成果は、(1) アダム・スミスが提唱した自由競争の理念は現代のネオ・リベラリズムが主張するような自由放任ではなく、人間がもつ自己愛と他人への思いやりを人間本能と捉えたうえで、社会的な適合性を模索する個々人の自発的努力を尊重する体系であり、(2) 市場社会の拡大を分業による生産力の発展に求めた彼の労働価値論と市場価格論は、基本的に、①他人の労働の価値をくみ取る共感の作用と②食料の栄養価値論を基礎にしていた点を、立証した点にある。

研究成果の概要（英文）：

At least two points are clarified by my research on close textual evidences: firstly, Adam Smith's idea of free competition is markedly different from the modern Neo-Liberalism's one, since Smith's conception of human nature composing from instinctive self-love and benevolence necessarily requires every member of the society to seek and attain some propriety of conducts, not to seek the licentious freedom; secondly, Smith's theory of natural price is fundamentally built on the sympathetic evaluation of other's labor, as well as the nutritional value of food especially of bread and corn.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学、経済学説・経済思想

キーワード：アダム・スミス、共感、利己心、倫理、道徳、自由競争、労働価値論、進化論

1. 研究開始当初の背景

従来のアダム・スミス研究は、『道徳感情論』についてはスコットランド啓蒙との関連で、

また『国富論』については、一方ではマルクス経済学の先駆としての古典派経済学の始祖、他方では新古典派経済学の始祖として評価され、両者の間をつなぐ思想や方法論は理

神論的、つまりニュートン的な方法であると理解されてきた。

しかし、遺稿として残された方法論文や『道徳感情論』を丹念に吟味すると、(1) スミス独自の方法はむしろ生物学的なものであること、(2) 『国富論』も根本的なところで共感と交換性向の働きを前提し、その上に独自の労働価値説が展開されていたこと、さらに以前から指摘してきた(3) 穀物の栄養価値論がその基礎であったのではないか、という疑問がいつそう強く湧いてきた。

そこで、(4) 初期論文集に残された方法論文、とくに「外部感覚論」に注目し、その執筆時期を『国富論』執筆時であることを、文献的証拠を通じて確認しながら、『道徳感情論』と『国富論』で、それぞれどのように「活かされていたか」を突きとめ、スミスの思想全体を再構成する必要があると思った。もちろん、こう考えてくる背後には、後にC.ダーウィンが、スミスの共感概念をきわめて高く評価し、あたかもそれが「道徳進化の理論」であるかのように理解し、彼自身の理論を組み立てていたという事実もあったのだが、それ以上に、(5) スミスにおける自由競争の提唱は、人間性と社会制度の発展とはどのように理論的に関連づけられていたかを解明し、功利主義的、個人主義的な自由放任論との違いを明確に理解する必要があるという思いがあった。日本では、ニュー・リベラリズムとネオ・リベラリズムの違いさえ、ほとんど曖昧にされてきたからである。

2. 研究の目的

本研究では、アダム・スミスにおける「倫理と経済学」の問題つまり社会的倫理と市場経済的利己心との対立という問題を、進化生物学や生態学的研究の成果に依拠しつつ、『道徳感情の理論』と『国富論』に内在して解明・再構成したい。結果的にスミスは、(1) 生物学的にみた人間と自然の統一的理解をめざした点で啓蒙思想を超えており、(2) 利己心による市場効率性の達成は、社会的動物である人間が仲間(家族)や社会と一体感を抱く範囲に限定されるから、利己心の追求は「人間に保証された自由の内容と程度」に従って「自然な」限度をもつこと、(3) つまりそれは個人(主観)による他人との関係(社会認識)の在り方=制度に依存するとスミスは捉えていたから、(4) 実質的に、スミスの方法論はC.ダーウィンの進化論と基本的なところで共通性をもっており、したがって、スミスの自由主義は現代のネオ・リベラリズムより格段の広さと深さを持つ、という事実を解明する。以上の点を論証できれば、スミス→マルサス・リカードウ→J.S.ミルという通説的なスミス経済学理解では、(5)

スミスの思想や経済学が秘めていた人間の進化論的理解の核心、つまり功利主義や個人主義を超える人間と社会の生物学的な解釈のもつ意義が見逃されてしまうから、改めて、進化論の見地から、動物行動学的方法に基づいて、経済学や社会思想の歴史的累積構造を再構築する必要性が明らかになるだろう。

3. 研究の方法

今回の研究は、かなりの程度「通説の批判」をめざすものであるから、とりわけ文献的証拠を明示する必要がある、ロンドンのリンネ協会、エジンバラとパリの国立図書館、および東京大学経済学部図書館で、18世紀の生物学研究や「スミス文庫の蔵書」について、資料を調査することが不可欠であった。それぞれほぼ所期の目的を達成でき、有意義な成果をえることができた。しかし、スミス晩年の親しい友人であったハットンとブラックのうち、「化学者」のブラックについては、今になって考えると、調査がたりなかったと反省している。ハットンの「火生説」と農業論を重視したのは良かったのだが、同時にハットンは「化学者」であったことを、軽視していた。「スミス文庫」の目録には、いわゆる「科学」関係がほとんど含まれていないのは、なぜかと疑問を抱くべきであった。スミスが物理学と生物学をどう理解していたかに焦点を絞ったわけだが、食物の栄養価値を価値・価格論の基礎に据えたスミスが、栄養の摂取について、どこから、どのような情報を得ていたのか、これは明らかに「胃腸における化学反応」を前提した分析であったのだから、もう少し慎重かつ広範に調査すべきであった。生物学や科学史関係の資料は、かなり調査・収集できてきているし、今後の課題が見つかったというふうに、今は理解している。研究成果を日本語だけでなく、英文でも発表できたから、一応目標を達したと思っているが、やっぱり英文の単著にする程度まで、現在の研究方法を継続する必要があると思った。また、海外の学会で報告しようと試みたけれど、何しろ学期中に欧米の学会にでかけると、休講とその補講を余儀なくされるため、体力的に難しかった。そこで、日本で開催された英語のワークショップで報告し、欧米の研究者と議論することとどめ、将来に期すことにした。

4. 研究成果

当該年度に発表できた研究成果は、以下の3点に要約できる。

(1) スミスがロックと同様に経験論者であり、ヒュームと同様に功利主義者であるとする従来の理解は、基本的に正しい。しかし、

スミスの特徴は、「生まれつき」の性質と「育つ家庭で身につけた」性質とを、前者を本能、後者を特徴と明確に区別しており、とりわけ後者については、自然が社会のなかで教え込むもの、と捉えていた点にある。その意味で、生得的な要素を否定し、人間理性の発展をいわゆる「タブラ・ラサ」に書き込む過程であると捉えたロックの経験論とは異なるし、すべての共感の基礎を効用に求めるべきであったヒュームの功利主義や慣習論とも異なっている。スミスにおける人間本性の理解は、自己保存をめざす自愛心と他人への思いやりが、共感を通じて社会的に一体感を形作ることを通じて形成され兒とする点で、明らかに、ダーウィンの社会的本能概念と共通性をもつし、ダーウィン自身がそのようにスミスの共感概念を理解していた。このようなダーウィンに比肩しうるような動物行動学的な人間理解は、最晩年の『道徳感情論』第6版の時期までつづけられており、『国富論』執筆時には「まだいづれとも言い難い」とされていた人間における「言語や理性」の発達は、感情を基礎に作り上げられると明確に主張されるようになった。このように、①生物学的に見た人間と自然の統一的理解をめざしたという点でスミスは啓蒙思想を超えていたということ、さらに、②従来、あくまでも初期論文とされてきた「外部感覚論」は、なお未完成であるとはいえ、その独自の主張に関するかぎり、『国富論』執筆時の生物学研究の成果であるということ、を、文献的根拠を明確にしつつ、論証することができた。

(2) 個人(主観)による他者との関係の認識(社会認識)は、個人と他者との関係のあり方＝社会制度にも依存している、とスミスが捉えていたことを厳密な文献考証に基づいて論証できた。

(3) スミスの自由主義は、現代のネオ・リベラリズムと較べ、格段に広く、しかも深いものがある。つまり、彼の労働価値説の基礎には独自の「自由」概念つまり自由＝心の平安があり、それが、食料の栄養価値という人間存在にとって絶対的で根源的な根拠に基づいて主張されていること、これを厳密な文献考証にもとづき論証した。こうして初めて、労働生産性の発展が、絶対的な意味で人間の「自由」を拡大すると言えることになるからである。

(4) 19世紀イギリスにおける社会改革思想の発展と展開の過程を、啓蒙思想の解体と再編成、つまり市場社会体制の確立と推転という社会の基本構造の大転換がもたらした社会問題に対して、政治思想・経済思想・社会思想の次元でそれぞれ展開された「対応策」の模索過程であると捉えたい。ここで、哲学的急進主義、自由主義、および新自由主義思想の歴史的特徴を、ダーウィンの進化論との

関連性を手がかりにして、それぞれの位置や意義を見定める作業を、H. スペンサー、T. ハクスリー、D. リッチーについて行い、社会改革と自由主義をどのように関連性づけていたか、また、それぞれ「進化論」をどのように理解していたかを綿密に検討した。結果的に、①ダーウィンの道徳進化論は、アダム・スミスが『道徳感情論』で展開した本能(先天的な特性)と習性(後天的な特性)、および、共感をつうじて後者が行為規範(法格言)にまで理性的に仕上げられていくという主張と、ほぼ同一であること、②スペンサーにおける進化とは、功利主義的進歩の思想に他ならず、むしろ、ダーウィン以前の進化思想であること、

③ハクスリーの進化論は、厳密に言えば生物学的というよりも、形態学的で哲学的な側面が強く、宇宙的進化というダーウィンとはかなり違った側面をもつこと、④リッチーは、ウォレスとダーウィンの進化論の違いを明確に理解・整理したうえで、進化論的功利主義を提唱して、自由放任一辺倒のスペンサーを批判し、新自由主義的な政府による社会改良政策を基礎づけていったこと、これを解明した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 高 哲男、19世紀後半イギリスにおけるニュー・リベラリズムの台頭とダーウィンの道徳進化論——H. スペンサー、T. ハクスリー、D. G. リッチーを手がかりに九州産業大学『エコノミクス』第16巻第4号、査読無、2012、99-170頁
- ② 高 哲男、アダム・スミスの労働価値論の再構成——労働、共感および穀物の栄養的価値、東京経大会誌、第273号、査読有、2012、25-46頁
- ③ Tetsuo Taka、Instinct as a Foundational Concept in Adam Smith's Social Theory, *The History of Economic Thought*、査読有、53(2)、2012、1-20頁

[学会発表] (計3件)

- ① 高 哲男、ふたつの進化論：C. ダーウィンとH. スペンサー——ダーウィンにおける道徳進化の理論を中心に——2013年3月16/17日 進化経済学会第17回大会、中央大学
- ② 高 哲男、アダム・スミス労働価値論の再構成——労働、共感および穀物の栄養的価値、経済学史学会西南部会第112回例会、

- 2011年12月10日、九州産業大学
- ③ 高 哲男、19世紀後半イギリスにおける
ニュー・リベラリズムの台頭とダーウ
ィンの進化論——H. スペンサー、T. ハクス
リー、D.C. リッチーを手掛かりに——
2010年12月11日、経済学史学会西南部会
第110回例会、九州大学

〔図書〕(計1件)

- ① Subjectivism and Objectivism in the
History of Economic Thought, edited by
Y.Ikeda and K.Yagi. London and New
York: Routledge. 2012. 193 頁 (執筆担当
Chapter 1, “Subjectivity, objectivity and
biological interpretation in Smith’s view
on the real values of labour, money and corn.
11-28 頁)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高 哲男 (TAKA TETSUO)
九州産業大学・大学院経済・ビジネス研究
科・教授
研究者番号：90106790

(2) 研究分担者

()
研究者番号：

(3) 連携研究者

()
研究者番号：